建設産業図書館所蔵資料紹介

シリーズ治水熱心家

古代中国の熱心家　禹王

「治水熱心家」とは！！‥‥治水に熱心な人のこと

禹（う）は中国の伝説的な人物で、最初の中央集権国家とされる夏朝の創始者とされます。武力ではなく、治水をもって国をおさめた英雄として信仰の対象となり、日本でも治水神として祀られています。今回は古代中国の治水熱心家・禹の関連資料をご紹介します。

禹王と日本人

「治水神」がつなぐ東アジア（NHKBOOKS）
王敏（著）／NHK 出版／2014 年

最初の中央集権国家を築いたという伝説の英雄である禹王。実在した人物だったのかは不明だが、中国では禹の前代である堯（ぎょう）・舜（しゅん）までが伝説であり、禹は実在したと考えられているという。

日本ではあまり知られていない禹王だが、実はわりと身近な存在でもある。たとえば、われわれになじみの深い「平成」という元号だが、『尚書』の禹を称えた「地平天成（地平らかに天成る）」が典拠となっているという説がある。

また、陰陽師などスピリチュアルな世界が好きな方は、「禹歩」という言葉を聞いたことがあるはずだ。天皇や貴人が外出するときなど、陰陽師が無事祈念するときに行う特殊な歩法と伝わる。さらには、五月の節句の鯉のぼりの由来となった「鯉の滝のぼり」や、立身出世の「登竜門」といった言葉も禹に由来する。

このように私たち日本人は、知らぬ間に禹と触れ合っている。そうした禹王とその信仰はどのように日本に流入したのか。本書ではその足跡に迫る。

治水神禹王をたずねる旅

大脇良夫・植村善博（編著）等／人文書院／2013 年

編著者の大脇氏は、企業を退職後に自分が暮らす足柄の土地について調べ、あることに気がついた。この地域には禹の別名である「文命」にちなんだ名前がいくつもある。足柄上郡開成町には文命中学校があり、足柄平野に張りめぐらされた文命用水があり、酒匂川には文命東堤と文命西堤がある。このように禹とつながる地域であるにもかかわらず、これらの由来は人々に知られていないのはなぜか。こうした疑問が出発点となり、「治水神・禹王研究会」が立ち上げられ、本書は日本における禹王遺跡および、禹王信仰の集大成としてまとめられた。禹王遺跡の探求については、全国の協力者を得て、あしかけ７年かかり集めた 57 件が収録されている。

日本禹王事典

植村善博（著）等／古今書院／2023 年

『治水神禹王をたずねる旅』の編著者でもあった植村氏らが、さらに全国の禹王遺跡を探求し、165 件を採録するに至った決定版ともいえる。ここで本書の概説などから、禹王についてあらましをご説明したい。

古代の中国神話では尭・舜・禹の三人の皇帝の事跡が有名であり、禹は黄河の治水に功績を上げ、舜から帝位を受け継ぎ「夏」王朝を創設した。およそ四千年前のことと伝わる。

禹は、治水に失敗した父である鯀（こん）に代わり、13 年間全土をめぐって治水に没頭し、「疏」と「導」の手法により黄河を治めたとされる。前述したとおり実在の人物かわからないが、春秋戦国期以降、功績や人格が高く評価されるようになる。たとえば孔子は、禹について「禹は吾れ間然すること無し　飲食をうすくして孝を鬼神に致し、衣服を悪くして美を黻冕（ふつべん）に致し　宮室を卑しして力を溝血に尽くす　禹は吾れ間然するこ

と無し」と非のうちどころのない人物とほめたたえた。「間然すること無し」とは「非難するところがない」ということ。つまり、孔子は二度もそれを強調して賛美しているのだ。

ちなみに禹の手法と紹介した「疏」と「導」だが、これは要するに「放水路」のことであり、日本でも有名な大河津分水や荒川放水路など、その手法により都市や穀倉地が洪水から守られている。

「大禹謨」再発見　それを受け継ぐ人たち

北原峰樹・岡部澄子（編）／美巧社／2013 年

「大禹謨」とは、中国の『書経』中の篇の名で「大いなる禹のはかりごと（計画）」というほどの意味であり、本書の「大禹謨」とは香川県高松市の栗林公園内商工奨励館の中庭に建てられた石碑のことをさす。

この石碑は、江戸時代初期の治水熱心家だった西嶋八兵衛によって、香東川の締め切り工事を行った際に、西嶋が自ら筆をとり、石に刻ませたという。その後、長い間、土に埋もれていたが、大正元年に香東川の堤防を修築する石材の中から発見され、大野村中津の薬師堂の横に安置された。さらに時がたち昭和 20 年に半ば埋もれているのを、郷土史家の平田三郎氏によって「再発見」された。本書は、平田氏の御息女である岡部澄子氏と、当時高松桜井高等学校の教諭だった北原氏によって編まれたもの。「再発見」時のいきさつや、論考集からなる。

ちなみに、「再発見」のいきさつをみると、埋もれていた石碑に「大禹謨」と書かれおり、しかも香東川畔にあることから、香東川の治水および西嶋八兵衛に関係があると思い至り、ゆかりの地である上野市で筆跡鑑定を行ったところ、どうやら真筆らしいと上野市役所から返事があったという。つまり岡部氏の話では、平田氏は西嶋の手によるものか確証を得ていなかったのだが、「大禹謨」は西嶋が建碑したものであり、そして真筆というのは公然たる事実となっている。

そのわけは、「大禹謨」移設先となった栗林公園の観光事務所長だった藤田勝重氏の『西嶋八兵衛と栗林公園』に詳しいので、この後ご紹介したい。

西嶋八兵衛と栗林公園

藤田勝重（著）／香川県栗林公園観光事務所内
大禹謨顕彰会／1962 年

藤田氏によれば、「大禹謨」が西嶋の建碑・真筆であると確定したいきさつは以下の通りとなる。

（再発見者の）平田氏は西嶋終焉の地である伊賀上野の市長に「大禹謨」の写真をおくり、市長より命ぜられた同市立図書館勤務の山本茂貴氏は、郷土史の権威である村治円次氏の鑑定を得て、西嶋の筆跡に似ている旨を書面で伝えた。※この時点では確証は得られていない。

平田氏が没せられたのち、藤田氏は「大禹謨」が真実西嶋のものか確かめることにした。そこで上野市に住む友人に写真を託して、再検討を依頼したところ、前期の村治氏をはじめ郷土史家などから西嶋に関する材料がたくさんあるから至急上野市に来るように求められた。

かくして藤田氏は、上野市におもむき、上野図書館に寄託中の西嶋自筆を多数目にし、更にかねて学名を拝承し、殊にその考証が、極めて慎重で、絶対に確実なものでない限りは論断されないという世評の高い村治氏に親しくこれについてお質したところ確信を以て西嶋の真筆であるとのお答えがあった・・ということらしい。

赤文字の部分だが、先に村治氏は「西嶋の筆跡に似ている」程度の回答をしているにもかかわらず、今回は確信をもって真筆と答えたという。しかも、彼の鑑定は絶対であることを強調するかのように、くどくどしく村治氏を賛美しているところがどうも引っかかる。

さらに藤田氏は「大禹謨」の文字について、「非常な気品と味わいをもってわれわれに迫るものがあるのは余程の神技」と述べているが、こうした美辞麗句を述べる時点で、妄信のきらいがある。

私はこれらに目を通して、大禹謨碑は西嶋が建碑したもので、しかも真筆と言い切ってしまうことに疑問を持つ。まず、碑には

建碑者や年代を探る手掛りは刻まれていない。裏づけする史料もない。香東川の締め切り工事にしてもそうだ。

香東川は、もとは大禹謨碑の出土地あたりで東西二川に別れていた。寛永年間に東の流路を締め切って西側一本にしたのが、西嶋八兵衛であるとされる。しかし、そもそも西嶋が工事を行ったことを証明する確たる記録自体がない。

最後に言い添えるが、こうした史料の研究というのは、たとえ「考証が、極めて慎重で、絶対に確実」だと噂の人物だとしても、筆跡鑑定のみで、しかも一人の郷土史家によって事実が確定してしまうのは危険だ。とりあえず、栗林公園は大禹謨が西嶋の手によるという説を一旦撤回し、もう一度再調査するほうがよいかと思う。